

278-148



1200501360402

278

48

昭和五年四月

農村圖書館標準目錄

第一輯

縣立長野圖書館



始



278
148x



農村文化と選書の標準

縣立長野図書館長
社會教育主事 田澤次郎

図書館に於ては、選書の標準を定める事が大切な事であり、
何れの図書館にあつても、國民性の涵養とか、學術技藝の研鑽に資す
るとか、或は産業の發達を促すとか、讀書趣味の養成に資するものと
か、一通りの標準が出来て居るものであります。然し其の上に、其の
地方的なもの及び時代の動きといふやうなものを、考慮の中に入れ
まして、図書館の上に個性を現はして行く事は、一層重要な事であり
ます。

私は今こゝに、農村図書館標準圖書目録を選定するに當りまして
も、(一)本館所定の標準を基礎といたしました外に、(二)農村である
点と、(三)長野縣の農村である点に、充分重きを置いた次第でありま
す。

(一)の一般選定標準は兎も角として、私の最も重点を置いたのは、第
二の農村である点であります。これも必要、あれも讀む方がよい位
に、漫然と選定して參りますと、多くの本は大抵其の中に入りません。

然かもそれは一般的に宜しいもので、都會と農村を對比して考へた場合に、その多くは都會人本位で、農村人本位のもものが極めて少いのに驚かされます。農村問題を論じて居る圖書でも、その著者は農民でなく都會生活をしてゐる學者か、或は農民生活上の體驗がなく、唯だ農村を客觀的に研究し、徒らに理論的に農村を玩んで居るに過ぎないと思はれるものが極めて多いのであります。

私は農村圖書の選定に當つて、その目標とした所は、如何なる農村文化を作興すべきかに在つたのであります。それは今日の文化も文明も都會地本位に築かれたものであつて、従つてその文化の爛熟して居る今日に於ては、その利益、害毒共に都會地に蘊醸して居るのであります。その対策が、所謂各種社會問題なり社會運動なりになつて現はれて來て居ると考へらるゝのであります。農村も此の渦流に巻き込まれ經濟的にも政治的にも乃至は社會的にも都會に吸引されて行つて居るのでさういふ事實は、正に農村疲弊の根本原因をなして居るのであります。

ですから今日の農村を救済するものは、この生まの儘では消化の出來ない、見方に依つては劇藥のやうな都會文化ではなくて、独自の農村文化であり、之を作興し、その個性の進展を圖り、其の活力を旺盛

にし、其の築かれたる農民文化の力に依つて、彼等の福利を増進して行くより途がないものと考へるのであります。其の特有の農村文化の作興が乃ち現代の都會文化の餘弊を緩和し、時代に方向轉換を與へ、人類の發展に新生命を與ふるに至るものと信ずるものであります。

然らば農村文化とは何であるかと申しまするに、それは先づ農村精神に基礎を置かねばならぬものであつて、歴史的に涵養して來て居る農村精神を現代生活の上に文化化して始めて農村特有の文化が生れるものであります。

而して又其の農村精神とは何であるかと申しまするに、それは(一)自然界を對象として生活して來てゐる点、(二)農業を生業として來て居る点、(三)散村生活をして來て居る点、(四)長い歴史を持つて發達して來て居る点、其他歴史的、地理的に傳統や環境等に依つて決定されるものでありまして、是等の影響、感化から自ら養はれた農民の所謂農民精神とも言ふべきものは、例へば、(一)敬虔親和、(二)單純素朴、(三)剛健眞摯、(四)現實和樂、(五)獨立不羈等の如きは其の例でありませう。農業は既に自然界に左右される事の多いものである限り、天を畏れ神を敬ひ、其の運命に極めて柔順である事は、何人も首肯

する事であり、其の生活は亦農業といふ簡単な職業である事から、單純素朴である事も亦自然であるし、然かも暴風、氾濫、其の他の天災に就いては、身命を抛つて防禦せねばならぬために、極めて剛健眞摯に鍛錬されて居り、然かも現實は極めて秀麗なる田園の中に、花鳥、風、月と相偕に和樂しつゝ、耕作に従事してゐる。唯だ獨立不羈といふことは、農民の現實より言へば、反對のやうであるけれども、それは歴史政治の悪い傳統が農民に依頼心を植付けたといふ後天性な悪習慣のものであり、其の本性は獨立不羈に相違がなく、それあるが爲めに、農民は實行力に富み、拓殖植民共に農民に依つて實現され、山岳も耕地と化し、荒蕪地も新植民地となり、所謂海外發展、國威の發揚は農民から始まるといふても宜いのでありまして、正に農民精神の本性であると認むるものであります。

斯の精神が基礎となつて出來上つてゐる農村は、正しく精神的結合の社會であつて、其の農村精神が各種に道德化されて或は、(一)敬神崇祖となり、(二)至誠不惑、(三)尙志樂道、(四)創造發展、(五)協同連帶等の徳目を普偏化して居る次第であります。而して是等の農民精神及び農村精神は、現代の都會文化即ち唯物的な資本主義、孤立的な自由主義などとは反對なるものであつて、全

一的な平和主義、協力的な連帶主義なものであるから、今後の文化を築造すべき最も妥當にして有力なる精神であるのであります。でありますからこの農村文化の作興といふ事は、現下の時勢に鑑みますと確に現在の急務であり、農村更生の一路であり、而して現代社會の救済策であるに相違がないと確信してやまぬのであります。

乃で此の精神を基礎として、其の文化の創造力を養ひ、農村道德を確立し、すべて各種の農村政策を行ひ、其の施設を講じて行く様に、農民に社會教育を行つて行かねばならない、これ即ち農村文化を取扱ふ者の着眼すべき事項であると考へるのであります。一例をとつて申しますならば、今、此處に「農村の社會生活を如何にすべきか」といふ問題に就て見ますに、これは都會文化の個人主義を其の儘に引移すわけには行きません、農村は家族制度の精神を最も多分に保有して居るものでありますから、この家族制度を現代化して行く事が必要であります。それには家族制度の社會精神の上に、組合組織の社會的結合が必要であると考ふるのであります。其の組合組織に就いては如何にするか、といふに今更、五人組制度でもありませんが、之を研究すべき新材料が有ります。之を農民各位に研究して貰ふ事にいたしましたして、例へば農村圖書館に折目六右衛門著の「成功せる農

村振興策」や岩井尊人著「最近のデンマークと農業の合理的共同經營」などの良書を備付けて置きまして、之を讀んで自分の村に適合する方法を發見するのであります。又農村の社會問題等に就いても、徒らに今日の經濟學者の書いて居る現代の農村相のみを視て理論を述べて居るに過ぎないやうな書物ばかりでは其の農村精神は湧いて來ない、農村問題解決に對する吾等の祖先の精神的努力といふ歴史的事實を研究して行く事が肝要な事でありますが、それには、國史上に現はれたる社會問題「皇室と社會問題」、「日本及日本人の道」等の良書を讀んで貰ふ事が宜いのであります。社會事業の如きも今日のそれは大體都會地本位のものであります。其の儘に農村には持つて來られないものが多いのでありますから、若し無理に運用するとなると、却つて厄介視されるに至るのであります。これには海野幸徳著の「農村社會事業指針」とか、社會教育研究所の「農村託兒所の經營」とかといふやうな農村に適合した本を推薦する事が必要であります。

斯ふいふやうな風に、すべて農村精神を本位とし、彼等の現生活に基礎を置いた「生活上必須の智識を彼等に與へて、其の根本精神に遡り其の本體を見詰めて、其の上に文化を培養して行つてこそ始めて

生々育々として農村が發展して參るものと思ふのであります。

私は農村には圖書館が絶対に必要な機關であると考へます。唯だ其の選書は農村精神の培養に基礎を置き、其の智識は生活上の實際に觸れて居らねばならない事だけは忘れてはならない事柄であります。

尙私はこゝに農村圖書館標準目錄を編むに當つて、以上の要件の外に特に注意致しました事は左の事項であります。

- (一)農民の容易に讀み且つ了解し得るものたる事
- (二)大多數の農民の讀み得るものたる事
- (三)生活上の實際に役立つものたる事
- (四)興味あり窮屈でなく讀め、且農民の思想を豊富にするものたる事
- (五)短時間に讀み得るものたる事

等であります。

最後に別記の圖書選定上の筋道を大略中しませう。第一段に於ては農民精神の涵養に資し、第二段に於ては農村政策並施設の大體を知悉せしめ、第三段に於ては其の精神を是等各種政策及施設の上に實現せしめんとした大凡三段に分れたものでありまして、第一段

に於ては文化の意義を明にし、各民族は各々民族精神の下に特異なる文化を作つて居る点を示し、就中我國と密接なる關係にある英國、米國、支那、丁抹の國民精神を特に彰にし、最後に我民族精神と民族文化の實際を研究し、それが農村精神と農村文化と如何なる關係にあるかを研究し得るやうに配列したのであります。第二段に於ては農村に行はるゝ政治、經濟、社會等の各種政策及び施設の大略を知らしめ、特に農村政策及び社會事業等を稍々詳細に研究が出来るやうにし、就中、農村社會生活及び文化生活の資料を多く供給した積りであります。第三段に於ては産業組合、海外發展、圖書館其他建設的方法の大略を知るやうに彙集してあります。

然し是等の圖書は本館備付けのものに就いて研究選定したものでありますから、或は同じ内容のもので他に良書のある事は無論有り得る事であり得ます。又圖書費大凡參百五拾圓程度を標準といたしましたから、圖書冊數の少い事も承知の上であります。且亦思想問題や研究科目に就いては深入りして居りませんから、是等特別の研究者から見れば、不満足な事でありませう。其の理由は、この選書の主旨に依つて御了解の事と思ひます。然し漸次第二輯、第三輯を重ねて完全にしたたい考へでありますから、此の点は充分御諒承を願ひ

たいと存じます。

兎も角各町村圖書館とも今日は圖書選定の時期でありますから、取急いで御紹介する事にいたしました。御參考されん事を希望いたします。

昭和五年四月

(一) 文化と民族精神

書名	著者	定價	發行所
文化の話	淺野利三郎	一・二〇	日本評論社
民族心理と文化の由來	好富正臣	一・八〇	實業之日本社
米國大勢論斷	土屋元作	二・〇〇	東京日日新聞社
丁抹農村文化の眞髓	平林廣人	二・三〇	文化書房
日本古代文化	和辻哲郎	二・五〇	岩波書店
日本精神史の研究	右同	三・二〇	右同
日本及日本人之道	大川周明	一・〇〇	行地社
國民性十論	芳賀矢一	〇・七〇	富山房
東西文明の調和	大隈重信	二・五〇	早稻田大學出版部
わが民族の理想	山本良吉	一・五〇	弘道館
皇室と社會問題	渡邊幾次郎	一・八〇	文泉社
國体に對する疑惑	里見岸雄	一・五〇	アルス
現代日本論	鶴見祐輔	一・六〇	大日本雄辯會

帝國の前途	大谷光瑞	〇・六〇	大乘社東京支部
農村忌避と農村文化	山崎延吉	〇・二〇	日本青年館

(二) 修 養

書 名	著 者	定 價	發 行 所
處 生 新 道	増田義一	一・五〇	實業之日本社
一 日 一 善	山本瀧之助	一・〇〇	希 望 社
地方青年世渡りの道	鈴木龍司	〇・六〇	大 盛 堂
敢然頂角を往く	二荒芳徳	一・五〇	實業之日本社
農村青年の針路	綱井太郎	〇・六〇	大 盛 堂
人間苦の諸相とその解決	宮澤英心	一・五〇	博 文 館
産業組合理事者の修養	左子情道	二・五〇	同 榮 社
平 凡 の 善 政	守屋榮夫	二・五〇	内外出版株式會社
都會の女より地方の娘さんへ	藏田清子	一・八〇	成 光 館

(三) 政治・國防・自治

書 名	著 者	定 價	發 行 所
小さい法學通論	星野 通	一・五〇	廣 文 堂
普通選舉の精神	上杉慎吉	〇・三五	敬 文 館
立 憲 勤 王 論	尾崎行雄	〇・七〇	文 會 堂
普通選舉法釋義	坂千秋等	三・五〇	松 葉 堂
政 治 讀 本	尾崎行雄	一・〇〇	日本評論社
陪 審 講 座	東京朝日新聞社	〇・八〇	東京朝日新聞社
國 防 新 論	佐藤鐵太郎	二・〇〇	民 友 社
日本を守る潜水艦	福田一郎	〇・八〇	政 教 社
地方自治之精神	守屋榮夫	二・八〇	帝國地方行政學會
農 村 自 治	小橋一太	一・八〇	日本評論社
市町村豫算の見方	西野喜作	一・八〇	秀 文 閣

(四) 社會と經濟

書名	著者	定價	發行所
社會讀本	永井 亨	一・〇〇	日本評論社
社會思想史概説	波多野 鼎	一・〇〇	右 同
社會思想讀本	田制 佐重	一・二〇	文教書院
日本思想論	永井 亨	一・二〇	早稻田大學出版部
社會問題明解	高木 斐川	二・八〇	教文社
農村問題の社會學的基礎	土田 杏村	一・二〇	ロゴス書院
人口食糧問題	那須 皓	二・〇〇	日本評論社
農村問題と對策	河田 嗣郎	二・八〇	改造社
家族制度と婦人問題	右 同	二・〇〇	右 同
職業讀本	高峯 博	一・五〇	教育研究會
職業指導讀本	職業指導協會	〇・三五	富山房
日本國勢圖會	矢野 恒太	一・〇〇	日本評論社
經濟讀本	太田 正孝	一・〇〇	右 同

(五) 農業と園藝

小作調停法講話	長島 毅	一・八〇	清水書店
財政讀本	下村 宏	一・二〇	日本評論社
農村經濟	河田 嗣郎	二・〇〇	右 同
農村財政	清水 長郷	二・〇〇	右 同
銀行の話	野田 兵一	一・〇〇	文 明 社
日本農村經濟の研究	高橋 龜吉	一・五〇	先 進 社
米穀經濟の話	農村黎明會	〇・八〇	文 教 堂
農村金融	牧野 輝智	二・〇〇	日本評論社
産業合理化の諸問題	不破 倫三	〇・五〇	叢 文 閣
民衆本位登記の實際	民衆法令普及會	二・五〇	松 陽 堂

書名	著者	定價	發行所
農業寶典	加藤 惠藏	二・九〇	養 賢 堂
農業原論	横井 時敬	三・三〇	興 文 社

農業土木學	田中貞次	二・〇〇	目黒書店
農用機具學	稻垣乙丙	二・五〇	博文館
稻作實際論	岩槻信次	二・八〇	養賢堂
陸稻の作り方	久保田喜代太郎	二・五〇	西ヶ原叢書刊行會
簡易農用藥劑	渡邊吉	一・〇〇	養賢堂
病虫害寶典	原攝祐	二・九〇	右
通俗肥料講義	般津常吉	三・二〇	成美堂
綠肥及堆肥	岡崎一	一・五〇	西ヶ原叢書刊行會
肥料土壤寶典	鶴田萬平	一・九〇	養賢堂
養鶏經營法	平山美佐男	一・六〇	資文堂
屑繭の處理から加工まで	河東田辰雄	一・五〇	明文堂
蠶病から見た蠶の飼ひ方	鍵谷傳	一・〇〇	右
農蠶業經營と共同化	千坂高興	二・三〇	右
飼料から見た蠶の飼ひ方	鍵谷傳	一・〇〇	右
全芽條桑育講話	永井壽一郎	一・二〇	右
春蠶簡易飼育法	石井彌平	一・三〇	右

夏秋蠶新飼育法	永井壽一郎	二・五〇	明文堂
養蠶業收支採算法	早川卓郎	一・〇〇	右
組合養蠶の話	片田銀五郎	二・〇〇	右
蠶業讀本	田中義麿	一・八〇	右
園藝寶典	富樫常治	二・九〇	養賢堂
西洋草花の知識	石井勇義	二・五〇	資文堂
蔬菜栽培要訣	中山文一	二・五〇	泰文館
新提 要 土壤學	關 豐太郎	二・〇〇	目黒書店
園藝害虫驅除法	高橋 獎	二・五〇	明文社
樹木病害篇	原 攝祐	四・五〇	養賢堂
果樹栽培と增收法	山本豊次郎	〇・六〇	大盛堂
理想的桑の作り方	清水市平	二・〇〇	明文堂
桑園の肥料と綠肥法	鍵谷 傳	一・〇〇	右
枝・の 剪り方	田中牧吉	〇・九〇	寶文館
苹果 柿 葡萄	恩田鐵彌	一・四〇	博文館
梨 櫻桃 李 梅 杏	右 同	一・四〇	右 同

柑橘無花果枇杷栗	恩田鐵彌	一・四〇	博文館
----------	------	------	-----

(六) 青少年團と圖書館

書名	著者	定價	發行所
少年赤十字	蛭川新	〇・五〇	博愛發行所
スカウト讀本	深尾韶	〇・七〇	實業之日本社
青年團とは何ぞや	日本青年團研究會	〇・五〇	日本魂社
現代の青年運動	海野幸徳	一・五〇	内外出版株式會社
健兒の社	上野篤	二・五〇	中文館
獨逸に於ける青年運動の精神	玄澤剛	〇・二〇	日本青年館
通町村圖書館の施設經營	成瀬涓	一・八〇	名古屋靜觀堂
學校學級兒童圖書館經營	小林佐源治	三・〇〇	目黒書店
ナに立つ 役に立つ 圖書の整理法	乙部泉三郎	〇・五〇	一二三館
成人教育	文部省	三・二〇	帝國書院
日本陸上競技規則解説	全日本陸上競技聯盟	〇・六〇	三省堂

(七) 農村と社會生活

陸上競技の研究	野口源三郎	二・八〇	目黒書店
アールベルグスキー術	高橋次郎	二・〇〇	博文館
相撲	樋口雋次郎	二・八〇	目黒書店
登山	田中薫	二・三〇	右同
劍道	佐藤卯吉	一・八〇	右同
キヤンピング	茂木楨雄	一・〇〇	アールス

書名	著者	定價	發行所
日本に適する衣食住	中山忠直	一・〇〇	寶文館
田園生活の向上	福井武治	二・三〇	日比書店
新興の農村	江坂佐太郎	一・三〇	泰文館
日本一の百姓となるまで	新井友吉	三・八〇	明文堂
農事小組合活動の實際	折目六右衛門	二・二〇	龍吟社
田園の伴侶	野崎信夫	一・二〇	博進堂

學校寺院を原動力とする社會改良	田子一民	二・一〇	巖松堂
農 民 讀 本	富田文雄	〇・七〇	米本書店
成功せる農村振興策	折目六右衛門	二・八〇	龍吟社
社會事業と方面委員制度	小河滋次郎	一・八〇	巖松堂
兒童の社會問題	増田抱村	一・五〇	同文館
農村社會事業指針	海野幸徳	〇・六〇	内外出版株式會社
兒童保護問題	右 同	一・二〇	右 同
社會衛生學	暉峻義等	四・八〇	吐風堂
トラホーム診斷治療豫防講話資料	日本トラホーム豫防協會	一・五〇	南山堂
呼吸器病の豫防と手當	小田俊三	一・八〇	博文館
療 養 新 道	遠藤繁清	一・八〇	實業之日本社
胃腸の新らしい衛生	坂本東造	一・五〇	右 同
手のひら療治	三井甲之	一・五〇	アールス
精 神 衛 生	文 部 省	一・二〇	帝國學校衛生會
農家組合の實際活動	伊藤千代秋	〇・八〇	長野 柏與印刷所
産業組合の話	農村文化協會	一・五〇	農村文化協會

消費組合巡禮	本位田祥男	二・三〇	日本評論社
最近のデนมールクと農業の合理的共同經營	岩井尊人	二・五〇	有斐閣

(八) 婦人と家庭生活

書 名	著 者	定 價	發 行 所
女らししく	棚橋絢子	一・二〇	忠誠堂
結婚讀本	高田義一郎	一・二〇	春陽堂
分娩と育児	井上秀子	三・〇〇	文光堂
遺傳優生胎教保育	見波定治	四・八〇	成美堂
家庭管理法	井上秀子	一・五〇	誠文堂
子供のために	西山哲治	一・五〇	右 同
家庭料理	林たま子	一・八〇	青葉書房
簡易なる毎日のお惣菜	料理研究會	〇・五〇	文陽堂
毎日のお惣菜料理法	主婦之友社	〇・六〇	主婦之友社
本裁着物の仕立方	右 同	〇・六〇	右 同

子供和服の仕立方	主婦之友社	〇・六〇	主婦之友社
羽織帯襦袴の仕立方	右 同	〇・六〇	右 同
小鳥二十種の飼ひ方	右 同	〇・六〇	右 同
漬物の上手な漬け方	右 同	〇・六〇	右 同
衣類洗濯法と保存法	右 同	〇・六〇	右 同
パンの造り方三十種	右 同	〇・六〇	右 同
裁縫の初歩より奥義まで	稻庭卯吉	一・〇〇	松榮堂

(九) 文藝と趣味

書名	著者	定價	發行所
花の生け方	須山法香齋	一・〇〇	東洋圖書會社
生花の見方と生け方	角谷綠三	一・九〇	主婦之友社
圍碁大觀	雁金準一	一・五〇	誠文堂
將棋大觀	木村義雄	一・五〇	右 同
寫眞の撮し方	三宅克巳	一・五〇	アルス

日本畫の研究	北原茂雄	一・五〇	アトリエ社
西洋音樂通	小松清	〇・七〇	三省堂
それか	夏目漱石	〇・三〇	改造社
脱線息子	佐々木邦	二・〇〇	大日本雄辯會講談社
土に生きる	富田岩代	一・〇〇	信濃毎日出版部
理想の農家	石田傳吉	一・七〇	松陽堂
宿命	沖野岩三郎	二・八〇	福永書店
坊ちやん	夏目漱石	〇・二〇	改造社
うるさき人々	楚人冠	二・〇〇	朝日新聞社
新生	島崎藤村	一・四〇	春陽堂
破戒	右 同	一・三〇	新潮社
田園の英雄	松岡讓	二・〇〇	第一書房
赤穂浪士(上・中・下)	大佛次郎	四・五〇	改造社
右門捕物帖	佐々木味津三	一・八〇	大日本雄辯會講談會
猿の群から共和國まで	丘 淺次郎	二・五〇	共立社
光落日	吉田絃二郎	一・八〇	新潮社

無憂華	九條武子	二・〇〇	實業之日本社
中道を歩む心	鶴見祐輔	二・五〇	大日本雄辯會講談社
文は人なり	高山樗牛	二・八〇	博文館
川中島の戦	埴科教育會	〇・五〇	二松堂
維新風雲回顧録	田中光顯	二・〇〇	大日本雄辯會講談社
釋迦とキリスト	菊地愛二	一・〇〇	浩文社
將軍乃木	櫻井忠温	一・二〇	實業之日本社
ムツソリニ傳	澤田謙	一・二〇	大日本雄辯會講談社
歴史を創る人々	早坂二郎	〇・九〇	中西書房
グラッドストーン	永井柳太郎	一・五〇	實業之日本社
巨人を語る	清澤列	一・二〇	三省堂
母としての乃木夫人	芹澤登一	一・三〇	實業之日本社
大宗敎家の生涯	西本幹	一・三〇	弘道閣
血涙のあと	實業之日本社	一・七〇	實業之日本社
人としてのペスタロッチ	大久保龍	二・八〇	大同館
黒部谿谷	冠松次郎	一・八〇	アルス

(十) 海外事情

土の上水の上	櫻井忠温	二・〇〇	實業之日本社
世界めぐり	三宅克巳	一・五〇	誠文堂
南洋叢談	藤山雷太	一・〇〇	日本評論社
海外立志傳	日本力行會	二・〇〇	日本力行會
南米ありあんさ移住地の建設	信濃海外協會	二・〇〇	信濃海外協會
新渡航法	永田稔	二・〇〇	日本力行會
東亞の現代の朝鮮	梶川半三郎	三・五〇	六合館
大富源	高岡熊雄	三・五〇	寶文館
ブラジルの實生活	神戸久一	〇・九五	海外社

(十一) 辭書・其他

書名	著者	定價	發行所
(新譯)漢和大辭典	濱野知三郎	二・〇〇	六合館
小辭林	金澤庄三郎	二・五〇	三省堂
新しい言葉の字引	服部喜香 植原路郎	二・〇〇	實業之日本社
作文講話及文範	芳賀矢一	二・八〇	富山房
書翰文辭典	畑由之助	一・〇〇	富文館
祝賀弔祭演說附式辭文範	雄辯研究会	一・五〇	止善堂書店
尾崎行雄大演說集	大日本雄辯會	二・〇〇	大日本雄辯會講談社
高島米峯氏大演說集	右同	二・〇〇	右同

昭和五年四月廿四日印刷
昭和五年四月三十日發行

非賣品

長野市長門町
發行所 縣立長野圖書館

長野市旭町乙一
印刷所 長野新聞株式會社

終